



Title	結婚と人間関係の変容：ジェイン・オースティンとE. M. フォースターの小説研究
Author(s)	川口, 能久
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47105
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	かわ 川 ぐち よし 能 ひさ 久
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 0 7 2 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 11 月 2 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	結婚と人間関係の変容—ジェイン・オースティンと E.M. フォースターの 小説研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 玉 井 暲 (副査) 教 授 森 岡 裕 一 教 授 林 正 則 助 教 授 服 部 典 之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリス 19 世紀初頭の小説家ジェイン・オースティンと 20 世紀前期の小説家 E.M.フォースターを取り上げ、この二人の小説に共通する特徴として結婚を中心とする人間関係に注目し、この観点より、両者の小説がもっている今日的意義とそれらの小説が孕む問題性を考察した研究である。論文全体は、まえがき、本論全 9 章、あとがき、注、引用文献から構成されており、総頁 A4 判で 181 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 640 枚からなる論文である。

論者は、まえがきにおいて、イギリス小説は、結婚を中心とする人間関係を現実的かつ具体的な状況の中で描く点にその基本的特徴があることを主張したあと、こうした特徴をもっとも鮮やかに描いた小説家としてオースティンを挙げ、その特徴を継承した小説家としてフォースターを位置づける。続いて、後輩作家フォースターがいかにオースティン信奉者であったかを、フォースターの著作からの豊富な例証によって、両者を結ぶ文学的系譜の存在を検証し、彼らの小説世界の類縁性の輪郭を明確に描き出す。

論者は、オースティンとフォースターを一つの大きなパースペクティブのもとに捉えて、オースティンから 4 小説を選び、フォースターからは 5 小説と同性愛を描いた 2 作品を論の対象に取り上げる。本論では、これらの各作品にほぼ 1 章を割いて、結婚と人間関係をめぐるプロットの展開、主人公たちの精神と行動のありよう、作品としての完結性の問題等について丁寧に考察を加えてゆく。

オースティンを扱う第 1 部では、『分別と多感』には、分別の多感に対する優位性を訴えるプロットの下に、分別の限界と多感への支持を表す別のプロットが潜在することを主張し、『高慢と偏見』では、主人公の結婚に集約される理想的人間関係を際立たせるために他の 3 つの結婚が有機的に機能していることを解明し、『マンスフィールド・パーク』では、マンスフィールド・パークの館に表象される価値観や思想の世界に揺らぎが生じていることを説き、『説得』では、女主人公が軍人という新しい階級に所属する男性との結婚に至る展開に、分別ではなくてロマンスへの傾斜を見て取って、ここにオースティンのこれまでに見られなかった新しさを指摘する。

フォースターを扱った第 2 部では、初期小説の 2 作『天使も踏むを恐れるところ』、『眺めのいい部屋』にあつては、イタリヤを舞台にした小説世界を導入して、相対立する世界・価値の調和と融合の表出を志向しながら、主人公たちにはそれが十分に達成できないところで終わっていると主張し、『果てしない旅』では、男性同士の人間関係を描くに当たり、同性愛的関係を前提としながら、そうでない形で描いている点にこの小説の重要性を見て取り、『ハワー

ズ・エンド』では、先行する3小説の集大成と見ることもできるにしても、人間関係の確立というフォースターにとっての問題が十分に解決されずに終わるという、いわば作品としての不完全さのもつ意味を考察し、『インドへの道』では、異文化を背景にもつ主人公たちの人間関係に対して明確な解答を安直に提示していないところに、小説家フォースターの理想的解決への強い希求のすがたを読み取ろうとする。

同性愛小説の『モリス』と短編集『来世、その他』では、中産階級と下層階級との、知性と肉体との対立というフォースター文学に見られる共通の特質に関して、他の作品ではなしえなかった階級制度の否定と肉体・本能の重視が明確に描かれていることを明らかにし、ここにこれらの小説の新しさと意義を指摘する。

最後のあとがきにおいて、論者は、オースティンとフォースターの描く恋愛と結婚を中心とした人間関係に性的要素の希薄さを見て取り、むしろそれは倫理的・精神的な世界を表象する関係であると指摘する。また、二人の小説家は、同様に人間関係に注目するにせよ、オースティンでは作者の価値観にそぐわない思想・倫理観の持ち主を徹底的に排除する傾向を示すのに対し、フォースターでは、異質性をもつ人物たちを結びつけようとする面が存在することを述べ、両小説家の間の共通性と相違面を明らかにして論を終える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、英国小説、なかでもイギリス的風習を丁寧に描き込んだ、特に19世紀初頭のジェイン・オースティンに始まり20世紀現代小説の中にも連綿と繋がっている伝統的なリアリズム小説を研究の対象にして、この伝統の中から、その代表的作家オースティンと現代モダニズム時代の小説家E.M.フォースターの二人を選び、両者の小説を一つの視野に入れて相互関連性を探るという極めて意欲的な研究である。女性作家オースティンと男性作家フォースターを結ぶ文学的コンテクストについては、その問題設定にいくらかの困難が予想されるであろうが、先行研究に見られた散発的な考察を整理・克服して、「結婚」と「人間関係」が二人の小説家のもっとも重要な共通のテーマであると真正面から指摘し、このテーマを男女間の恋愛面のみならず、男性の同性愛関係の視点をも踏まえて新しい角度から検討し直したところに、本研究の新鮮さが指摘できよう。本論文は、オースティンとフォースターの小説世界の全体像を提示する研究であるが、その基盤をなすものはそれぞれの小説テキストを綿密に読解した個々の優れた作品論である。たとえば、オースティンの最後の小説『説得』を分析した論は、一つのテキスト分析が、ひいては、分別と感情・ロマンスの相克というオースティン小説が孕んでいた問題に鋭い洞察を提示した総括的論考に発展するという、各論と総論との鮮やかな融合の典型である。また、『モリス』論に窺われるように、フォースターの同性愛小説に描かれる人間関係への考察が、同時に、同性愛を必ずしも明示的に描写していないフォースターの他の小説における人間関係についての示唆的な総括的分析となっているのも、本論の優れた面である。

ただし、本論文においても問題点がないわけではない。オースティンとフォースターとの間のテーマの関係性については、考察をさらに深めることのできる余地が残されている。先行研究との関連についてより詳しい論述があれば、本論の独自性が一層明らかになったものと惜しまれる。また女性作家と男性作家との差異性について少し触れて欲しかった気もする。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。